

九州大学附属図書館蔵『たまも』解題と翻刻(下)

天野, ひろみ
九州産業大学 : 非常勤講師

辛島, 正雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

河内, 美香
岡山県玉野市役所 : 職員

坂本, 信道
京都女子大学 : 教授

他

<https://doi.org/10.15017/1518334>

出版情報 : 文献探究. 53, pp.1-12, 2015-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

九州大学附属図書館蔵『たまも』解題と翻刻(下)

翻刻

太摩薄 下終 (表表紙・打付書)

みんはたまものまへのちゑへんさい
の人にすくれたるのみにあらず
ひかりをはなち身よりにほ
ひをいたす事をあやしくおほ
しめして御心のうちにそらお
そろしくおほしめしけれとも
なんゑんふたいたい一のひしんと
も申つへきあひた御心さしの色
はまことにたゝことならずこう
かんのまへにははるかにちきりを

天野ひろみ 辛島正雄 河内美香 坂本信道
宮崎裕子 森誠子 梁丹

ちとせのまつにむすひてかう
れいのむしろのうへはとをくよ
はひをまんくこうのかめにござ
あかしくらしおはしまし候ところ
おもはさるほかにきよきたいふ
ようの色ありよのつねの御けし (一才)
きならずとおほしめさるゝとこ
ろに日にしたかひて御なふをも
らせおはしますあひたてんやく
のかみをめして御たつねありけ
るに此御なふはしやきにてわた
らせおはしまし候ほとに御れう
ちくわへたてまつらん事あるま
しく候よし申ければさらは

をんやうのかみをめせとてあへのやすなりをめしてうらなはせらるゝにとかくくはしき事をは申さす此御なふについて御大事しゆつらい候へしとおほえ候御きたうをいそきなさるへく候と申ける」(一ウ)

「絵」(二オ)

きんちうの上下大きにおとろきてなんとほくれいのかうそをしやうししよ寺じしよ山のかうけんある人をめして大ほうひほうのたんをならへ談たんきやうねんしゆのこゑをとゝのへていのりたてまつりける一七日の御きたうすてにけちくわんにをよひけれともつゐにそのしるしなし御身いよく御おとろへありければあちきなくおほしめされ御なみたをなしたまふたまものまへのてをとりておほせありけるはふんたんしやうしのさかいもしもわか身とても

たのむへからすしやはむじやう」(二ウ)

のさとをくれさきたつならひかねてよりごするといへともあへなくわかれたてまつらむ事をおもへはひつめつのはりにもまよひゑしやちやうりのいはれもわすれぬへく候そやとおほせありけるにたまものまへ申やうわれらていのほんふくあんわうしやくのものにかたしけなくもせうてんをゆるされまいるのみにあらずあまつさへ御てうあひをかうふりれうかんにちかつきたてまつる事これせんせのしゆくしうと申なからくわこのかいきやうもありかたく候あはれひさうてんの八」(三オ)

まんこうもたまたせまいらせはやとのみいのり申あて候ところにもしいかやうなる御事も候はんには一日へんしも世になからふへくもおほえず候たゝわれらしやうかくのすゑまで

も御ともをこそ申候はんすれ
と御そはにゐてふししつみこ
ゑをたてゝかなしみけり」(三ウ)

「絵」(四才)

御きたうすきぬれはしるしも
なき事をなけき御そうしう
もせうくたいくつありさまく
御きたうありといへともその
しるしなしていかゝすへき
とてしゆくみやういんやうの
かみをめして御たつねありけ
るにやすなり申やうかんもん
のさす所にくはしく言上ごんじやうつ
かつまつりたく候へとももしゑ
いりよにもそむきこうなん
もや候はんすらんとしんしやく
つかまつるとて申あけす候と
申ければくきやう一とうに
たゝはゝかるところなく一く
に申へきよしおほせいたさ」(四ウ)

れければやすなり申やう此御
なふの事へちのしさいにて

候はす化人けにんたまものまへのなす
わさなり此人をうしなはれは御
なふはやかて御へいゆあるへし
と申けるこれをきゝみな人々
けうをさまして物も申さす
あきればてたるふせいなり
此人のすこしも御そはをた
ちさるときは御わつらひおもら
せたまふ御そはにあるときは御
心ちもかろくなりたまひて御ゆ
なともきこしめされけるにとかく
此人をうしなはれは御なふはへい
あんあるへきとうらなひ申たり
けるに御わつらひをはさしをき」(五才)

これをなけきかなしまずと
いふ事なしかさねて又御たつね
ありければやすなり申やう
しもつけのくになすのに八百
さいをへたるきつねありかの
きつねのたけは七いろお二つ
あるへしかのきつねのゆらひを
申候はゝにんわうはんにやきやう
にいはいくむかし天らくくにひと
りのわうありそのわうに一人

のたいしありはんそくといふ
かのはんそくたいし千人のわう
のくひをきりてつかのかみにま
つりてみつからそのくらゐをと
らんとおほしめす万人のりき
しをあつめてとうさいなんほく
」 (五ウ)

のわうしやうにをしよせてとる
九百九十九わうをいけとりつゝ
いまわうひとりかけたりにかゝ
すへきとありけるに又をしへ
ていはくこれよりきたに万
里をゆきてわうありふみやう
わうとなつくそのわうをとり
て千人のかすにみてさせたまへ
と申ければりきしをつかはし
てかのわうをとるすてに千人
にみつゝとにくひをきりつか
のかみにまつらんとしけるところ
にふみやうわうたなこゝろを
あはせはんそくたいしにむかつ
てねかはくはわれに一日いとま
をゆるしたまへ三ほうをうや
」 (六オ)

たまひけるひまをゆるしぬその
ときふみやうわうくわこ七ふつ
のほうによりて百人のほうし
をうけてはんにはらはみつを
かうせしためまふそのたい一の
ほうしふみやうわうのためにげ
をといていはく劫焼終訖乾坤洞
燃須弥巨海都為灰揚といへり
ふみやうわう此文をきゝて四諦
十二因縁のむねをさとり法
眼空をえぬ又はんそくたいし
もしよほうかいくうのたうりを
きゝてあくきやくの心をひる
かへし千人のわうにむかつて
いはくこれわうのとかにあらす
」 (六ウ)

われけたうにすゝめられてあ
くいんにおもむくいまはをのく
はやくほんこくにかへりはんにやを
しゆきやうしてふつたうにおも
むきたまへとてはんそくたいし
たうしんをおこしむしやう法
忍をうと見えたりむかしはん
そくたいしをまつらんとせしとこ
ろのつかのかみとは此きつね也かの

きつねはんそくわうをたふら
かして千人のわうのくひをき
りてまつらんとするところ
ふつほうのいりきによりてだう
しんをおこしわうのくひをき
らさるあひたかのきつねふつ
ほうをかたきとしてせゝしやう」 (七才)

くをふるといへともいまにいたる
まてやかんの身をうけたりふつ
ほうはんしやうのくにゝことにけ
けんしてあるひはこうひさい
女となり又はしちよはいしんと
なりてれうかんをおかしたて
まつるわうのいのちをとりに
つゐにへんしてこくわうとな
らんとなつく周の宥王のき
さきとなりてつゐにゆう
わうをほろほしをはんぬそのゝ
ち朝しちいきにけんせり日
ほんはそくさんのせうこくなり
といへともふつほうはんじやう
したるわかつてうのふつほうをは
めつしわうのいのちをうはひ」 (七ウ)

て日ほんのわうとならんとち
かう也かのなすのゝきつねこれ
なりいまのけ女たまものまへす
なはちかのきつねなりと申ける
あひたひそかに此よしをそう
もんすれともゐんは御なふなを
をもらせたまふいかゝすへきと
ひやうきあるにやすなり申
やうせんするところ 太山苜君
のまつりをしてすなはちたま
ものまへを幣とりになさせ
たまへと申ければたまものまへ
のかほのけしきへんして申
けるはわれらその身いやしき物
と申せともかたしけなくも
れうかんにちかつきたてまつる」 (八才)

物なりけちよさいれいのへいと
りなとゝ申はあやしの下女しも
へのやくとこそうけたまはれさて
もおほき人々の中にわれ一人
にかきりはちをあたへられ候へ
きやとまことにいこんふかく申
されけるをときの大じんにてお
はしける人の申されけるやうはか

やうの事を申ははゝかりある事
にて候へともしゆくよう御さう
おふをんやうたうはさうこく
さうしやうをもつての吉凶をさ
たむる事よしあしをあきら
めし師とたんとさうしやうし
年と月とさうしやうし日
とときとさうしやうするをもつ
」 (八ウ)

てきたうしやうしゆし候あひた
ゐんちうのなん女上下そのかす
ありといへともちからなくさうし
やうせさせおはしまし候あひた
いんやうのかみさし申へく候その
うへきよくだいつゝかなくおはし
まし候はんこそ御身も身にて
候はんすれ御なうたちとこころに
へいゆ候はんをいてはいかやうの
御わさなりともなにかくるしかるへ
きや大しやうしやかせんゑ仙人
といはれさせたまひしときねん
とうふつたうをとをらせたまへ
はせんゑ仙人御かみをちらして
ていのうへにほどけをとをし
たてまつりたまふしやうむてん
」 (九才)

わうのきさきのみや百日のゆ
をたかせせん人のあかをすゝか
せましゝしをいにしへもいまもい
やしき事と申たる人は候はず
うき世をいとひのちの世を
おそれたまふ御心のほどをかん
したてまつるわかんりやうてう
にせうひせうたんましゝ候そ
かしこれはゐんの御なうをへい
あんせしめたてまつらんかために
たいさんふくんへいとらせおはし
まし候はんはんに御心さしのほどを
かんして御めいよにてこそ候へ
世のそしりはさらゝあるまし
く候と申されければたうり
のしこくありけるにやへいとりに
」 (九ウ)

おたちあるひしんのけふをはれ
としやうそくしたればまことに
こんこのをよふところにあら
すすてにへいをうけとりた
てまつるさいもんはんふんはかり
なるときへいをうちふると
見えしかはかきけすやうにう

せにけり」(十才)

「絵」(十ウ)

「絵」(十一才)

「絵」(十一ウ)

やすなり申ところたなころ
をさすかことくけんてう也いかに
してかのきつねいそきうしなはん
といふきやうせんきありぶし
をあつめてかの野をからせ候はや
といふきありけるに又あるきに
いはくこれはそのすかたちくるひと
いへともてんちくたうと日ほん
三こくにけんしてしんつう
しさいをゑたる物也ふつりき
なをもつてこれをしりそけ
たまはすいはんやほんふのちから
をもつてかれをうしなはん事
あるへからすと申されけるに
又あるきにしよほうはゑんより
しやうしゑんよりめつするなら」(十二才)

ひにて候あひたふつりきどしゑ
させたまはぬしゆしやうをほんふ
のけとしたる事も候たとひ
三こくにけんしてしんつう
をゑたるといへともいま日のもと
にをいてあらはるゝといふかの
物日ほんにてうしなはるへきゆへ
也そのうへゆみやのせひをゑ
かみやをいるほどの物なとか
かのきつねをいとらてあるへき
かかんでうのけいか九つの目を
射おとしほんてうのよまさ
かくもゑのうへのぬえをいおと
ししんのふのやうゆうはか
すみのうちのかりをいおとし
けるこれみなゆみのたつしや」(十二ウ)

にてかみやいる物也いまもほんてう
になをゑたる上すのいてを
もつてからせ候はんになにのし
さいの候へきやと申さるゝ」(十三才)

「絵」(十三ウ)

此きしかるへしとてめいよのふし

を御たつねありいまとうこくに
めいよしたるはかつさのかみみうら

のすけりやう人こそ候へと申

されけるあひたちきにゐんせん

をくたせとてりやうすけに

あてゝゐんせんをなしくたさる

そのゐんせんのおもむきはこん

とゐんの御なふにつきてをん

やうたうちよく申むねありし

もつけのくになすのにたけ

七いろ尾二つあるきつねはんへり

かのきつねをうしなはれは御なふは

たちどころにへいあんあるへ

しとおほえたりしかれはいそ

きかのきつねのありところに「(十四才)

はつかうしてくたんのきつねを

かりてまいらすへきよしおほ

せいたさるゝむねくたんのことし

すてにゐんせんさしくたされ

ぬれはかつさのすけみうらの

すけきやうすいつかまつりし

やうゑをちやくしていしやう

にひさまつき三どはいした

てまつりこれはいけんつか

まつり御うけ申「(十四ウ)

〔絵〕(十五才)

やかて一もんの物ともをもよほし

てひやうきしけるはとうこくに

人おほしと申せとも身にあ

てゐんせんをくたさるゝ事い

ゑのめんほくといふなに事か

これにしかんせんするところわ

れをわれとおもはん人は一人も

のこらすかのところにおもむき

ゆみやのひしゆつをつくしこく

をうつきすうちいてけりわれ

さきにといそきけるほどに

ほとなくなすのにつきにけり

かのなすのゝていを見めくらす

にへうゝたるあれのゝくさふ

かくおひしけり人馬じんばもわけ入

へきやうもなししかりといへとも「(十五ウ)

せいをもつてくさをきりはらひ

むまにまかせてかけ入めんゝを

のゝやうゆふかいしゆつにもこへ

りくはうかかみやにもすくれはや

とおもひつゝ心のよふところ
かりめくるにすこしもたかはす
きはめて中々大きにしてお
二つあるきつねことにしけり
たるくさむらの中よりはせ
いてぬりやうすけの人々われ
さきにかうみやうせんとかけ
たり一めんにしんつうしさいを
ゑたるへんけの物なるあひたゆん
てにあればめてへきれめてにあ
れはゆんてにきれうへをはしれは
したへくゝり四はう八はうをすこし
」 (十六才)

もとゝこほらすしかれはくにく
にかへりてゆみやのはかりこと
をしあんしけるにかつさのすけ
はかりことにはきはめてはやき
むまにさくりをかけてひかせ
まりのおつるところをやとこ
とせんとたくみみうらのすけ
はかりことにはきつねはいぬに
にたる物なりとていぬをかけ
させ百日のあひたいぬをいて
物あひふしきのやとこを射^い
いたしけりそのゝちいまはなにと

かかりゑさらんとてなすのに
こへてこれをかりけるになをも
かりゑす七日七夜とうりうす
七日もすきければわかたうも
」 (十六ウ)

つかれてしもへもたいしゆつすかつ
さみうらのりやうすけはすこし
たかきところにうちあかりて
ひやうちやうするやうは此事に
よりにわれらなくゆみやのき
ずをつけん事こそくちおしき
したいなれ人の心のたけき事は
はんくわいにあひおとらしはか
りことのおかき事はしかうにも
すくれはやとそんし候へともかつ
せんしようふのにはにあらされ
は身をすていのちをすつるに
をよはすしんたいこゝにきはま
りぬせんするとこ此きつねを
かりゑすは二たひほんこくへかへる
へからすこれよりゆみやにわか
」 (十七才)

れ三かいるらうの身となりな
かくさんりんにましはり候へしなむ
きみやうちやうらい日ほんちんじゆ

ことにはいせてんせうくわう大しん
百わうしゆこ八まん大ほさつへつ
してはうつのみやにつくわうこん
けんみやう日中に此きつねいと
らせたまへたとひいかなるしん
つうしさいのきしんといふとも
いかてかわうしやうにはおそれさら
ん世はきようきにをよふといふ
とも日月はいまた地におちたま
はずわうゐいかてかくつへきゑん
きのみかとの御事をうけたまはる
にわうゐをしろしめされんため
にいけにあをさきのゐたるを」(十七ウ)

六ゐをめしてあのさきいたきとり
てまいれと御ちやうある六ゐすゝ
みよるところにさきたゝんとす
るこれはわたくしになんちをとらん
とするにあらすちよくちやうにて
ありまかりたつへからすと申ける
にさきやかてひれふしとられ
けるそのときてんかのゐとくを
あらはしたるとりなれはなんち
てうるひのわうなるへしとて
五ゐになされはなされけるそれ

よりしてあをさきを五ゐと申
とかやわうゐのおもむきかくの
ことしいかてかむかしにおとるへき
まつたいなれはわうゐのむかしに
あひおとるといへとも日ほんの」(十八才)

しんきみやうたうちからをあはせ
たまはんになとかとらざらんとし
しやう心にいのりたてまつるす
こしまとろみたるにみうらのす
けのゆめに見るやうとし二十は
かりなるみめかたちつくしく
よのつねならさる女はうのみうら
のすけにうちむかつてなみた
をなかし申やうわかくわんすてに
まんすしゆはう又たりぬと心は
かなくなんちにいのちをうしなふ
へししかるへくはわれをたすけよ
此たひわれをたすけたらはしゝ
そんくゝをまほるへしといふと
おほえてうちおとろきぬやか
てわかたうをおこして申やう」(十八ウ)

たゝいまふしきなるゆめを見る
此きつねをとらん事あんのこと

くやすかるへしうつたてやといふ
まゝにむまのはるひをしめてい
またふけうにかりめくるところ
にたつときのはしめにあ
さ日のつるくといつるときく
たんのきつねのより山へはし
りいらんとするところをみうら
のすけむちをうつてゆんてに
あひつけそめばのかふらやをもつ
ていとゝめぬ」(十九才)

〔繪〕(十九ウ)

〔繪〕(二十オ)

それをとり夜を日についてし
やうらくしあんの御けさんに
まいりたてまつりければきたい
みもんの事なりとて御かんぎよのあま
りちよくちやうをなされ候やう
なんちなすのにてこれをかりつ
らんときのしやうそくをちやくし
御まへにてつかまつるへしとて
あかいぬ一ひきかけていたさる此
ころまでそれをいきいぬを物

となつけたりきつねをはほう
さうとこめられいまにいたるまで
これあり

一此狐きつねのはらの中に金こかねのつほあり
その中をみれば仏舎利ぶつじやりありこれを
みんへ進しんじやう上ある」(二十ウ)

【下巻了】

〔付記〕

本稿は上・下ともに、平成二十四年度京都女子大学研究助成(国内
研究員)による坂本信道氏の九州大学での研修に併せて、九州大学国
語学国文学研究室にて実施された研究会「たまもの會」による成果の
一部である。以下に、研究会開催日及び各人の担当箇所を記す。

平成二十四年

四月二十一日	ガイドダンス	
六月九日	坂本信道	上巻一丁表一行く五丁表五行
七月七日	宮崎裕子	六丁表く八丁裏六行
八月四日	梁丹	八丁裏六行く十一丁裏十行
九月一日	辛島正雄	十一丁裏十一行く十六丁裏三行
十月二十日	森誠子	十六丁裏三行く十七丁裏八行
十一月十七日	天野ひろみ	十七丁裏八行く二十丁表十行
十二月十五日	宮崎裕子	下巻一丁表一行く三丁裏九行

平成二十五年

一月二十六日 梁丹

四丁裏一行く八丁表七行

二月二十一日 天野ひろみ 八丁表七行～十丁表八行
三月十一日 河内美香 十二丁表一行～十四丁裏十行
四月六日 森誠子 十五丁裏一行～十八丁裏三行
坂本信道 十八丁裏三行～二十丁裏十六行
”

(あまの ひろみ・九州産業大学非常勤講師)
(からしま まさお・本学大学院教授)
(かわち みか・岡山県玉野市役所職員)
(さかもと のぶゆき・京都女子大学教授)
(みやざき ゆうこ・九州産業大学講師)
(もり さとこ・九州産業大学講師)
(りょう たん・本学大学院博士後期課程)